［研究室だより］

研究室を訪れた人々（2002年度）

2002年6月7日（金）
ポーランドＴＶ局チーム取材のため来訪

外務省の招待によって来日したTVP「ポーランド・テレビ」（Telewizja Polska）のチームが研究室を訪れ、スラヴ文学研究室の長谷見一雄・沼野充義が取材に応じ、また大学院の授業風景も撮影された。取材チームはディレクターのJadwiga Stefanowicz-Wolskaさんの他、カメラマン、音響技師の3名。今回の取材で同チームが特に興味を持っているのは、日本とポーランドの関係、変革期にある政治・経済・社会、伝統文化、現代ファッションなどとのことだったが、研究室では主として、日本におけるポーランド文化への関心やポーランド文学の受容などについての取材が行われた。ただし、天皇のポーランド初訪問を控えた時期だっただけに、訪波される陛下にポーランドのどんな面を見ていただきたいと思うか、などというまったく予想外の質問もディレクターから飛び出し、それに答える羽目になった沼野は目を白黒させた。

2002年7月16日（火）
トマーシュ・グランツ博士特別講義

「サイケデリック・リアリズム――現代ロシア文学における変容意識状態の詩学について」

«Психоделический реализм. Замечания по поводу поэтики измененных состояний сознания в современной русской литературе»（講義はロシア語、通訳なし）

北海道大学スラブ研究センターの夏期シンポジウムのためにチェコから来日されたトマーシュ・グランツ Tomáš Glanc博士（カレル大学哲学部スラヴ・東欧研究科科長）をお迎えして、特別講義をお願いすることができた。同氏はロシア文学の専門家で、最近は特に現代の最先端の前衛的文学に踏み込んだ鋭い論理的分析によって知られるまだ若々しい気鋭の論客である。例によって、講義終了後は有志と懇親会。ビールの本場チェコからやって来たグランツ博士は、日本のビールを賞賛。このようなチェコの第一線のロシア文学者と交流する機会は珍しく、いかにも「スラヴ文学研究室」らしい有意義な企画だった。なお、この講義はチェコの歴史の専門家である篠原琢先生（東京外国語大学）のご厚意によって可能になった。厚くお礼を申し上げます。

2002年8月24日（土）
ドミトリー・コヴァレーニン氏を囲む懇話会

「現代ロシア文化事情・現代ロシアにおける日本文学（特に村上春樹）の紹介をめぐって」

外務省の「日露草の根交流」プログラムで日本に招待されたドミトリー・コヴァレーニン Дмитрий Коваленин 氏を招いて、講演・懇話会を開催した。コヴァレーニン氏は現在モスクワで活躍中の日本文学翻訳家・評論家。特に村上春樹を初めてロシアに紹介した功績は大きく、ロシアにおける村上春樹ブームの立役者として高名で、今後ロシアにおける現代日本文化紹介の中心となるべき若手として期待されている。懇話会には学外からも多くのロシア研究者が集まり、過去10年の日本滞在歴を持つコヴァレーニン氏の流暢な日本語によって進められたが、出席者からは同氏が「ロシア語を話すところも聞きたい！」との声があがり、討論は日本語とロシア語の二ヶ国語が入り乱れた形で（ただし通訳はなしで）熱心に行われた。このような対話こそが自然な「国際交流」ではないか、とつくづく思わされた。

学外の関連企画としては、青山ブックセンター本店カルチャーサロンで8月19日にコヴァレーニン氏のトークショウ「村上春樹と翻訳」が行われ、ゲストとして村上春樹氏と親しい文学部英文科の柴田元幸氏と沼野が参加したが、こちらにも多くの聴衆が集まり多くの質問がコヴァレーニン氏に集中し、盛会となった。〔なお、コヴァレーニン氏はその後、国際交流基金招聘フェローシップを受けて来日し、われわれの研究室の外国人研究員として2003年6月から一年の予定で日本滞在中である。〕

2002年9月19日（木）
ヴィクトル・エロフェーエフ氏講演会

テーマ「今日のロシア文学——保守派と革新派」（ロシア語・通訳つき）

コメンテーター　亀山郁夫（東京外国語大学）
　　望月哲男（北海道大学）

司会　沼野充義（東京大学）

主催　東京大学文学部スラヴ文学研究室・日本ロシア文学会国際交流委員会（共催）

協力　国際交流基金

国際交流基金の文化人招聘プログラムで初来日した現代ロシアを代表する作家の一人、ヴィクトル・エロフェーエフ Виктор Ерофеев 氏（1947年生まれ）をお迎えして、日本ロシア文学会国際交流委員会と共催で講演会を開催した。保守派と革新派が激しく対立しあうロシア文学の現状について、現代ロシア前衛文学の＜総帥＞ともいうべき作家エロフェーエフの立場から生の声が聞ける貴重な機会となった。さらに現代ロシア文学に詳しい亀山郁夫氏、望月哲男氏の特別参加を得て、議

論が立体的・多面的になり、実質的には小シンポジウムと呼んでもいいような充実した会となった。なお、この日はたまたまエロフェーエフ氏55歳の誕生日であり、講演会後の懇親の宴は作家の誕生日を祝う会をかねて、いつもにもまして盛り上がった。

なお、この機会に資料集『エロフェーエフ読本』（A4版、25ページ、沼野充義編）を作成した（残部があるので、希望の方はお申し出ください）。

2002年10月4日（金）
ミコワイ・メラノヴィチ教授を囲む懇談会

ワルシャワ大学東洋学研究所日本韓国学科が平成14年度国際交流基金奨励賞を受賞し、授賞式のために同学科長ミコワイ・メラノヴィチ Mikolaj Melanowicz 教授（日本近代文学専攻）が来日された。皇太子殿下や川口順子外務大臣などの列席を得て盛大に行われた授賞式・レセプション（於東京全日空ホテル）の後、メラノヴィチ教授にわれわれの研究室にも足を伸ばしていただいた。懇談の場には、ワルシャワ大学との学術交流に関係の深いスラヴ文学研究室・国文学研究室の教官数名と、ワルシャワ大学から文部科学省国費留学生としてわれわれのスラヴ文学研究室に留学中の Jan Krzysztof Filipek 君が参加し、今後の両校の交流のあり方について、有意義な意見交換ができた。

東京大学とワルシャワ大学は1978年に故・吉上昭三先生の尽力によって学術交流協定を締結して以来、学生・研究者の交換を中心に活発な交流を行ってきた。交流にあたってワルシャワ大学側の中心になっていたのが、同大学東洋学研究所の日本学科（現在、統合されて日本韓国学科）である。東京大学側の交流担当役は、われわれのスラヴ語スラヴ文学研究室がつとめており、しばしばワルシャワ大学から研究員や留学生を受け入れている。

ワルシャワ大学日本韓国学科は長年にわたるポーランドにおける日本研究・日本語教育への貢献を認められて今回の受賞にいたったのだが、同学科の活動にはわれわれの研究室を通じての東大との交流も深く関わっており、今回の受賞はスラヴ文学研究室としてもわが事のように慶賀すべき快事だった。メラノヴィチ教授とは今後も東大との交流をいっそう発展させることを約束しあって、和やかな懇談を終えた。

小渕フェロー（外国人研究生）の受け入れ
アレクサンドル・クラーノフ氏　2002年4月～2003年3月

日露青年交流センター（外務省）の第3回小渕フェローシップ（「ロシア人若手研究者招聘」プログラム）を受けたジャーナリストのアレクサンドル・クラーノフ Александр Куланов 氏を、スラヴ文学研究室で大学院外国人研究生として受け入れることになり、同氏は2002年4月から1年間、東

京大学に滞在し、「ロシアにおける現代日本イメージの研究——ロシアでは正しく現代日本が認識されているか」というテーマの研究に携わるかたわら、日本の文化人やロシア研究者の多くに会って、精力的な取材を行った。同氏の研究成果の一端は、2002 年 11 月 22 日（金）に大学院演習で行われた報告 «Япония в глазах россиян: Правда и вымысел»（「ロシア人の目で見た日本——真実と虚構」）や、*SLAVISTIKA* XVIII (2002) に掲載された論文 «Некоторые особенности моделирования и формирования образа Японии в России»にうかがうことができる。前者の論文は、後に、ニューヨークで刊行されている由緒ある文芸誌 «Новый журнал» 誌第 231 号（2003）にも掲載された（インターネットでは http://magazines.russ.ru/nj/2003/231/kulanov.html で全文を読むことができる）。

なお、クラーノフ氏は 2003 年ロシアに帰国後、日本を専門に扱うインターネット上の雑誌 «Japon.ru» (http://www.japon.ru/) を創刊し、また日本での取材・研究成果をふんだんに取り込んだ著書 «Тайва: Разговоры о Японии, разговоры о России» (Захаров, Москва, 2003, 283 стр.)（『対話——日本についての会話、ロシアについての会話』ザハロフ社、モスクワ、2003 年、283 ページ）を刊行した。この本には、日本・ロシアの多くの文化人のインタビューが収録されているが、日本人としては和田春樹氏、中村喜和氏、堤清二氏、河東哲夫氏のほか、俳優の栗原小巻さんも登場する。

ロシア帰国後のクラーノフ氏のこういった目覚しい活動には一年間の研究生としての留学経験が大いに役立っており、フェローシップはきわめて有意義に活用されたものと評価できる。クラーノフ氏のようなジャーナリストを大学で受け入れるのはあまり前例のないことだったが、同氏の受け入れは日露文化交流の発展のためにきわめて有益であっただけでなく、大学のロシア研究者にとってもよき刺激になったものと思われる。この事例からも明らかなように、大学における国際交流はもっと柔軟に、もっと積極的に枠を広げていくべきであろう。

関連行事

第 19 回＜東京の夏＞音楽祭（アリオン音楽財団）「音楽と文学」

研究室主催ではないが、スラヴ文学研究室の研究・教育活動に密接に関わる関連行事として＜東京の夏＞音楽祭「音楽と文学」を記録のために挙げておく。これには沼野が企画委員として参加し、スラヴ文学研究室の大学院生たちにも通訳やゲストのガイド役など、様々な形で協力してもらった。この音楽祭の枠内で私たちに直接関係ある企画としては、以下の二つのものが行われた（詳しくはアリオン音楽財団のウェブ・サイト http://www.arion-edo.org/tsf/2002/program/ を参照）。

2002 年 7 月 4 日（木）シンポジウム＜音楽と文学＞　出演：ゲーリー・スナイダー、ゲンナジ・アイギ、ドゥルス・グリューンバイン、司会：沼野充義

2002 年 7 月 9 日（火）コンサート＜ロシア現代詩と音楽＞アイギとグバイドゥーリナの出会い

この音楽祭のために特別に来日したチュヴァシ系ロシア語詩人のゲンナジ・アイギ氏や、タター

ル系ロシアの作曲家ソフィア・グバイドゥーリナさんには、今回は残念ながら研究室に来ていただく時間的余裕がなかったが、お二人ともわれわれの研究室の誇る以前からのよき友人であり、今回も準備に関わった大学院生たちと交流し、惜しみなく大きな刺激と与えてくださった。本を読んで覚えたことは忘れてしまえばお終いだが、こういった「本物」の芸術家と直に触れ合った体験は人間の中に必ず何らかの形で――たとえ秘められた形であっても――残る。それがこういった交流の絶大な「教育的」意味だと私は固く信じている。　（沼野充義　記）

SLAVISTIKA に掲載の木村敦夫氏の論文「『結婚申し込み』――detail の積み重ねによるおかしみ」（**XV** 号）、「『創立記念日』――日常生活の一こまの喜劇」（**XVI/XVII** 号）は、多くの部分が既存の研究の紹介であると判明しました。論文ではなく、文献紹介として掲載すべきであったことをお詫びし、ここに訂正いたします。

SLAVISTIKA 編集部